

○課題

- ・課題学習の位置づけの検討に時間を要した。
- ・生徒の課題の捉え方が教員によって異なり、統一することが難しかった。

(中垣克彦)

【5】平成13年度の取り組み

1. 課題学習のグループ分け

グループ分けの観点は、見通しを持つ力をもとにした。生徒が学習活動に臨む際、長期的な見通しを持つことができる生徒は、何週間か先の活動を楽しみにしながら目標に向かって幅広い活動に取り組める。教師は、その何週間かを一つのスパンとして学習を組むことができる。また、すぐ目の前にある活動に没頭する段階の生徒には、分かりやすい活動で1単位時間の学習を構成する必要がある。このように、見通しを持つ力をもとにグループを作ることによってより個に応じた活動設定や支援の工夫ができると考えた。

グループ分けの概要は次のとおりである。

やったねタイムグループ

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
生徒の見通しの持ち方	なりたい自分をイメージし、それを目標にできる。  ----- 少し長い期間の見通し	具体的な「やりたいこと」や「できるようになりたいこと」を目標にできる。  長くても数週間程度の見通し	今、目の前の活動をやりたいと思う。  今日、明日ぐら いから1週間先 の見通し	視覚的な情報をもとに、自分なりの見通しを持つことができる。
支援を考える上で大切にしたいこと	自分の思いをもとに、人の考えを聞きながら自分で考えて決めることができる。 失敗を次の活動に生かす。	達成感を積み上げる。 がんばれる自分、誇れる自分を感じられる経験の蓄積	やりたい気持ちを膨らませる。 今の活動を楽しみきる。	構造化などにより、活動を分かりやすくする。

2. 生徒の課題の捉え方

「生活を楽しむ子」を研究テーマに掲げる以前は、指示通りに動ける生徒や、自分の思いを必要以上に我慢して周囲の大人に合わせる生徒像が望まれる傾向にあった。その背景としては、指示に従って効率よく働けることが、就労につながっていくとい

う社会の要請があったことは否めない。作業に必要とされる文字や数の力などについて具体的な項目が要望として挙げられたこともあった。その頃の「課題」とは、望ましい生徒像と実際の生徒の姿を比べ、足りない部分を補強するような方向で捉えられていた。

しかし、「生活を楽しむ子をめざして」という研究テーマを掲げて実践していく中で、教師が生徒の「課題」を捉える観点が次第に変化してきた。

### ①生活を楽しむ

学校生活の中に「生活を楽しむ」という視点が取り入れられたことで、生徒が進んで学習しようとする活動設定や、支援を大切にしていこうという考え方に少しずつ移行していった。しかし、学習内容は生徒一人ひとりに応じた幅広い内容に取り組むというよりは、ことば・数など狭い範囲の基礎学力の習得をねらったものが多かった。

### ②人格的自立

平成12年度、本校では児童生徒の自立の捉え方を見直そうとした。よく使っていた「社会的自立」という表現から「人格的自立」という表現への移行を試みた。「人格的自立」についての明確な定義はなく、この言葉について各学部で検討を行う中で「人格的自立」の概念を捉えようとした。この中で、中学部では「人格的自立」について「自分らしい人生を送る」「主体的に生きる」「その人なりの自立の姿がある」等の捉え方が出てきた。このように自立の概念が健常者の生活に近づけるという狭い考え方から、積極的に支援を求めることを含めた百人百様の自立の姿を大切にしていこうという幅広い捉え方に変化してきた。

### ③子ども自身や周囲の人々の願い

このような自立の概念の変化から、生徒の課題の捉え方も以前のような足りない部分を補強するような方向から、子ども自身の願いや子どもを取り巻く大人たちの願いを寄せ合わせる形で、学習活動が作り上げられる方向に少しずつ変化してきた。

また、生徒の課題の捉え方の変化に伴い、学習内容についても広がりが見られた。以前のように基礎学力の習得を中心とするのではなく「基本的生活習慣」、「基礎学力（読む・聞く・話す・数・量など）」、「生活のスキル」、「自立活動（情緒の安定・コミュニケーション等）」、「働くことにつながる力（巧緻性・集中力・働く態度等）」等、幅広い取り組みが見られた。

### ④「生活に直結した力」へ

平成12年度、生徒の「課題」を捉える視点の一つとして「生活に直結した力をつける」ということを考えた。課題学習を通して身に付けた力が学校生活のみならず、家庭でも社会でも、発揮できるようになって欲しいと考えた。

「生活に直結した力」について話し合う中で、次のような考えが出された。

**生活**とは

その生徒の現在の生活及び、将来の生活も含めたもの

**力**とは

技能や知識だけでなく、意欲などの心情面も含めたもの

**生活に直結した力**のイメージ

- ・ 将来の生活の中で必要となるだろう力
- ・ 生活の中で生かせる力

支援者が誰であっても同じ支援で発揮できる。

断片的でなく様々な状況で使える。

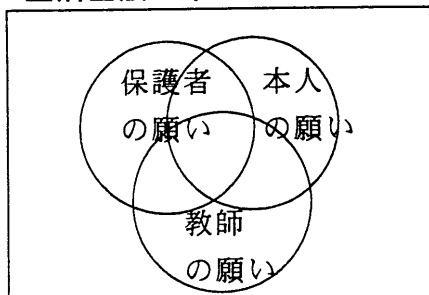
生徒にとって達成感を感じることができる。

生徒自身がやってみたいと思う。

以上の意見を集約するものとして、生活全般における「保護者・本人・教師の願いの重なり」に着目した。三者の願いの重なる部分には、私達が「生活に直結した力」と考える要素が全て含まれているのではないかと考えた。

(この考え方については、平成12年度の研究協力者の戸田先生が本校の授業研究会の中で話をされていた。また、本校の授業研究会の中で小学部からの提案もあった。)

**生活全般の中で**



**本人の願いは・・・**

やってみたい  
達成感を感じる

**保護者の願いは・・・**

家庭の中で生かせる力をつけて欲しい。  
将来、必要となる力をつけて欲しい。  
自分なりの方法や、自分らしさを生かした形で社会参加して欲しい。

**教師の願いは・・・**

断片的でなく様々な状況で使える力  
支援者が誰であっても同じ支援で発揮できる力

つまり、「保護者・本人・教師の願いの重なり」は、私達がやったねタイムでねらう「生活に直結した力」ではないかと考えた。

### 3. 保護者・本人・教師の願いの重なりをいかした授業づくり

三者の願いの重なりを具体的に見つけようとする生徒について、子どもへの将来的な保護者の願い・担任の願い・聞き取りによる本人の願いをまとめ、中学部の教員で話し合った。しかし、その時点で集めた資料では高等部卒業後を想定した部分があるなど不十分な面があり、三者の願いの重なりを表現することは困難だった。そこで、今後の取り組みとしては、従来の方法で学習活動を設定した後、その活動の中での保護者や本人の願いを聞き取ることにした。これにより、より焦点を絞った三者の願いを吸い上げることができ、その願いの重なりが見つけやすくなるものと考えた。

授業づくりは、まだ取り組みを始めたばかりである。

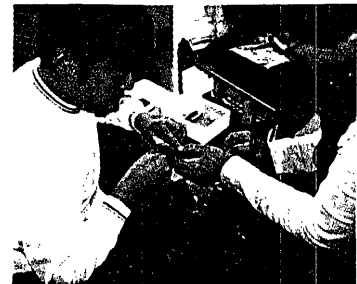
平成13年度10月～11月に実践した学習の中で、先に述べた保護者・本人・教師の願いの重なりという視点を取り入れた実践を紹介する。

#### やったねタイムBグループの実践

##### 1. 単元名 「つくろう！マイバッグ」

##### 2. 単元設定の理由

やったねタイムBグループでは、子どもたちの興味・関心・願いの共通項から目標を設定し、その目標に向かって活動を反復したり、関連する様々な要素の学習を織り込む中で、おのずと技能が定着することを願って単元を作っている。



このグループの生徒たちは、①物に対して愛着が持てる。思いを込めて制作活動ができる。②家事に関心がある。家庭で何らかの手伝いをしており、学習を家庭で般化することが期待しやすい。③具体的な少し近い見通しを持つことで、学習に意欲的に取り組むことができる。このような特徴に対応した題材として、日常生活で日々使うことのできる袋物の制作に取り組むこととした。

##### 3. K児の事例を通して

##### ①単元設定に際して

保護者の願い	本人の実態・願い	教師の願い
家族の一員として、自分なりの役割を果たしながら、一緒に暮らしていくことを願っている。	家事全般に興味がある。小学部時代に刺し子をした経験があり、最近では運動会のゼッケンを自分でつけるなど縫い物に興味を示している。	実生活の中で生かせる技能を積み上げ、簡単な調理や裁縫など身の回りのことが少しずつ自分でできるようになってほしい。

②単元の内容

単元名「自分のペンケースを作ろう」  
 (K児が「袋物」という投げかけの中で、自分で選んだ題材)  
 「何を入れようかな」・「どんな色、どんな柄」・「材料を買いに行こう」  
 「糸を通そう」・「縫ってみよう」・「スナップをつけよう」・「ボタンをつけよう」

③成果と課題

学習と家庭とのつながり	学習の中で定着したこと・拡がり	今後の課題
妹が、学習で作っているリュックサックに興味を持ち、妹にミシンの操作を習いながらお母さんに手伝ってもらおうことなく自分でリュックサックを作り上げた。	3ミリ程度の間隔の点線を目印に、かなり正確に運針ができるようになった。 糸通しが一人でできるようになった。 スナップやボタンを少しの支援でつけられるようになった。 余った布で小袋を追加して作り、好きな先生へプレゼントした。	身につけた技能を実用のみでなく、生活の豊かさにつなげていくような活動設定と支援の必要を感じた。

4. 考察

これは、学習で得た達成感や興味の拡がりが次の活動の意欲へとうまくつながっている例である。グループ内の他の生徒も、個人によって多少の違いがあってもそうした循環が見られる。しかし、手指の巧緻性や、必要とする支援の内容は個人差が大きく、今回取り上げた裁縫という技能を実生活へつなげて行くには、様々な角度からのアプローチが繰り返し行われることが必要と感じられた。



(田中祐子)

【6】成果と課題

1 やったねタイムの成果と課題

○やったねタイムの時間設定について

やったねタイムを2校時目に帯状に設定したことにより、生徒は反復・継続して学習に取り組むことができた。この点により、学習に対する見通しを持ちやすく、意欲的に取り組めた。また、繰り返すことにより技能が定着しやすい面も見られた。

自閉症児に対して、行事に左右されない見通しの持てる生活時間が保障できた。

○グルーピングについて

教師は、支援を焦点化して考えることができた。また、ゆったりとしたペースの生